HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ピア・サポーターへの道 ： 1年目の終わりに
Author(s)	堀, 翔太郎
Description	第3部: ピア・サポート活動の考察 <<コラム1>>
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）p.123-125
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49507
Type	report
File Information	column1.hori.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コラム１
ピア・サポーターへの道　～１年目の終わりに～

堀翔太郎[1]

１．ピア・サポートとの出会い

私が人生で初めて「ピア・サポート」という単語を耳にしたのは、１年間の浪人生活を経て、北大に入学したばかりの頃だった。どの新入生も、履修する授業選びと教科書の入手に腐心していた 2010 年の春。ある時、同じクラスの友達が耳寄りな情報を教えてくれた。「無料で教科書を配るイベントがあるぞ」と。もしかしたら使える教科書がタダで手に入るかもしれないと考え、即座に耳目がそちらに向かった。

それを聞いた日の放課後、「もし１冊も持って帰れなくてても、ダメで元々」という気持ちで、教養棟内の会場に向かった。廊下に臨時で設けられた机のみのブースに、先輩方が寄付してくれた本の入ったダンボール箱。そしてその周りに立ち、このイベントを運営しているらしい、緑のジャンパーを来た北大生と思しき人たち。その時、自分が使えるような教科書は残念ながら入手できなかったが、「ピア・サポート」とかいう組織がこういう「お得なイベント」をやっているんだな、というのが私と北大ピア・サポートの初めての出会いだった。

２．学生支援をテーマとした演習の授業を履修

私とピア・サポートの接点として次に挙げられるのは、１年後期に受講した新入生向けのセミナーである「学生支援におけるピア・サポートを考える」である。20 名前後の少人数で行われる一般教育演習（フレッシュマンセミナー）というカテゴリーに属するこの授業は、松田康子先生が当時立ち上げた、新しい試みであった。授業を通して学生が自ら実地で８つの学内支援機関へのインタビュー調査、学生へのアンケート調査などを行なって学内の支援ニーズを探り、ピア・サポートに対して今後の在り方を提案することがゴールとして定められていた。

私がこの演習に学期を通して参加したいと思ったのは、「ピア・サポート」だったり「支援」という言葉が持つ暖かみに惹かれたこともあるが、初回の授業で岡本さんをはじめとするピア・サポーターの人柄に触れ、色々なところから多様なメンバーが集まっているピア・サポートという組織が行う活動に言い知れぬ魅力を感じたことが大きかった。

３．「学生支援におけるピア・サポートを考える」で得たもの

半年間の演習で学内支援機関に対してのインタビュー調査や友人・知人へのアンケート調査を行なった結果、学内にどのような学生支援期間が存在し、各々がどれだけその機能

[1] 北海道大学文学部　学部生

を果たしているのか、北大生が必要としている学生支援がどのようなものなのか、といったことが少しずつ明らかになってきた。

多くの支援機関にとって最も大きな問題は、利用者が極端に少ないことであった。ここ数年の間に設立されたものが多く、そもそも存在自体を知られていなかったり、知られていても敷居が高くなってしまっていることが多かった。またどの機関も、いかにして支援を必要としている学生に利用してもらうか、というのが悩みの種であった。

そこで重要となってくるのが、ピア・サポートという組織の役割だと私は考えた。「この組織は、学内支援機関と学生を円滑に結びつけることができる。組織として果たすべき役割が明確に定まっていないからこそ、他の組織にはできない柔軟な立ち回りができる。

一つの理想状態はこうだ。新入生をはじめとする北大生が、ピア・サポート室を一つ情報拠点として日々積極的に利用する。ピア・サポーターは学内のあらゆる機関の情報を網羅し、来室者の方に対していつでも適切な紹介が可能。バイト、サークル、分属、学習…学生生活に必要な様々なジャンルの情報がこの部屋にコンパクトに集約され、「情報を得たいなら、ピア・サポートへ行こう。情報を広めたくても、ピア・サポートへ行こう」とまで評されるようになる。

そのためには、まず北大ピア・サポートと学内支援機関との連携が必要であることに私は気づいた。当時はピア・サポーターでなかった私ですら必要性を認識していたのだから、仮に岡本さんが挨拶回りや電話帳の作成を提案していなくても、誰かが思いついて実行していただろうと思う。

４．私がピア・サポーターとなった経緯

「学生支援におけるピア・サポートを考える」で学内支援機関の状況や学生のニーズ、そして何よりピア・サポートという組織について学んだ私は、授業が終わりに近づくにつれて、学生支援という分野に対する興味を徐々に膨らませていった。

そんな時当時の北大ピア・サポートで代表を務めていた岡本さんに勧誘され、来年度から自分もピア・サポーターとして活動することを決めたのである。当時から「人の幸せに貢献する」ということに無上の喜びを見出していた私は、同じキャンパスで生活する北大生が豊かな学生生活を送れるようサポートするという活動理念に、深く共感したのである。

年が明けて 2011 年に入ると、学生支援課からピア・サポーターとして雇用してもらうにあたって必要な知識と技術を身につけるための研修が 1 回だけ行われた。内容は、傾聴技法の理論と実践を学ぶもので、改めて相談者の方と真摯に向き合うことの難しさを感じさせられた。また、研修を終えてからは、当時北大ピア・サポートが行っていた「本活」や、クラオリパック[2]作成の手伝いをするなどして、4 月からの本格採用に備えた。

---

[2] 北大で入学式前に行われるオリエンテーションで新入生に配られる資料パック。サークル・部活や生協のチラシ、パンフレットなどの媒体が大量に入っている。今年度から、北大ピア・サポートもこちらを利用して宣伝させてもらっている。

5. 実際の業務において学んだこと

かくして 2011 年 4 月から正式にピア・サポーターとして雇用され、有給で働く身となった。この１年ほどを通じて、私は学生生活では出会わなかったであろう世界に足を踏み入れ、様々な経験を得ることが出来た。

例えば、最初に取り組んだ挨拶回りと電話帳作成では、電話帳班としての活動を通じて、仕事の段取りをしっかり行うこと、そして密に相談・連絡・報告をすることの重要性を、身をもって知ることが出来た。丁寧で迅速に仕事をこなすためにはどうしたら良いのかということを常に考えさせられるピア・サポートのような環境に置かれたのは、私にとって初めてだったのだ。よく一般に「仕事でトラブルが起きる原因の９割は連絡の不行き届きだ」などと言われるが、まったくその通りだと思う。

また、学生支援課の下で北大ピア・サポートという公共の組織に属して活動していく中で、果たして自分の振る舞いが特定の利用者の方だけに利するものになっていないか、などの「公共性」を判断する力を育てることが出来た。なぜ特定の利用者を利してはいけないかと言えば、北大ピア・サポートは学生支援課の予算を頂いて活動している組織であり、そのお金は元をたどれば北大生の学費から出ているからである。こんなことを考えるようになったのは、ピア・サポーターになってからである。

そして、一番大きいのは、昨年の秋まで代表を務めた岡本さんや電話帳班で直属の先輩として支えてくれた平さんを始めとする、先輩方からのサポートを経験出来たことである。やるべきことが出来ていなければ叱る、に繋がる行動や姿勢を見せたり、実際に成果を出せば褒める、という当たり前のようでなかなか学生が体験できない貴重な指導を常に受けられる環境が整っている。ここで得た経験は、間違いなくこれから社会に出てからも私の武器にしていけるものだと確信している。

来年度からはいよいよ２年目に入り、後輩ピア・サポーターが加入すると同時に、北大ピア・サポートの中核を担う立場になる。しっかりと後輩を指導・育成するために、私自身が先輩ピア・サポーターとしての模範となっていく必要がある。私もまだまだ未熟者であるが、その立ち位置に甘んずることなく日々精進し、責任を持ってピア・サポーターとしての仕事に取り組んでいきたい所存である。